

陳舜臣さんを語る会通信

NO.113 Apr. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2024年4月1日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

陳舜臣生誕100年記念 シリーズ談話「陳舜臣 一人と作品」報告

シリーズ談話は陳舜臣入門講座、陳舜臣作品の読書案内のつもりで企画致しました。

チューターは、2003年に神戸大学大学院の修士論文で陳舜臣さんを取り上げ、その縁で、陳さんの台湾旅行にも同行した経験をお持ちの前田寿美恵さん（友の会会員）と橘がつとめました。

3回シリーズの各回内容は次のとおりです。

《第1回 2023年11月11日（土）、KCCビル10階会議室》

全作品を網羅した手作りの「陳舜臣年譜 一作品を中心に」を資料に話を進め、シリーズの導入としました。また、新聞連載小説12作、その他、週刊・月刊誌連載作品についても話題としました。

《第2回 12月9日（土）、KCCビル10階会議室》

「陳舜臣さんを語る会通信」並びに陳舜臣生誕100年記念特別展パネルの一部も紹介、「陳舜臣作品に描かれた神戸」を紙上で辿りました。「陳舜臣関連地点・建物 街歩き地図」も配付しました。

《第3回 2024年1月13日（土）、孫文記念館ホール》

会場が孫文記念館ホールであったこともあり、移情閣3階孫文像前での陳舜臣、玉岡かおる両氏の対談（2003年）から話を始めました。あと、「私が陳舜臣先生から頂いたもの」（前田）、「アジア、中国ものに見える"世界主義"」（橘）と続け、安井三吉先生の解説で締めくくりました。

なお、どの回も、参加者の、作品を通しての陳舜臣体験など、ご報告・ご発言があり、参加者同士が持論を交わす場面もありました。参加者については、移情閣（孫文記念館）友の会から多くの方にご参加いただきました。そのほかでは、『小説十八史略』が一番のお気に入りとおっしゃる小学4年生のお嬢

さん、陳舜臣生誕100年記念展を計画中の図書館スタッフの方々、大学生、大学の先生、アーティストと多彩でした。

参加人数は1、2、3回とも25～30人を数え、成功裏に終えることができました。



陳舜臣さんの人物像に迫る

生誕100年、神戸で連続講座

神戸出身の直木賞作家で、2015年に亡くなった陳舜臣さんの人物像や作品の魅力に迫る連続講座が神戸市内で始まった。ネット

上で「陳舜臣さんを語る会通信」を発行している橋雄三さん（80）＝明石市＝らが講師を務め、11日に行われた初回は約30人が集った。連続講座は、来年在陳さんの生誕100年に当たることから、移情閣友の会、神戸華僑華人研究会、神戸華僑歴史博物館が共同で主催した。

陳さんは1924年2月18日、台湾人貿易商の次男として神戸・元町に生まれた。大阪外国語学校（現・大阪大学外国語学部）卒業後、いったん母校で勤務したものの、終戦を迎えて日本国籍を失ったために退職した。橘さんはこの経緯を説明し「大学を離れて作家

になったことで、結果的にファンに愛される作品が生まれた」と解説した。橘さんによると、陳さんが生涯に書き残した小説は約250点。デビュー当初は推理小説がほとんどを占めていたが、次第に歴史小説に移っていったという。陳さんは72年の日中国交正常化後に中華人民共和国籍を取得し、何度も中国を旅行した。89年の天安門事件を経て再び日本国籍を得ると、今度は台湾訪問を重ねた。約20年前に神戸大学大学院の修士論文で陳さんを取り上げた前田寿美恵さんは、書き上げた直後、陳さん夫婦と台湾を訪れた経験を紹介した。「普段は寡黙な陳さんが、現地ではかつて足繁く通った頃の思い出を雄弁に語ってくれた」と振り返った。

コスモポリタン（国際人を自任した陳さんが自らのルーツをどのように認識していたか、聴講者同士が持論を交わす場面もあった。次回は12月9日午後2～4時、KCCビル（神戸市中央区海岸通3）で開催。申し込みはファクス（078・785・3440）で。神戸華僑歴史博物館 ☎078・31・38855（井原尚基）

陳舜臣さんについて語る橋雄三さん（右）と前田寿美恵さん＝11日、神戸市中央区海岸通3

シリーズ談話で使用した資料の一部を2、3、4頁で紹介いたします。

シリーズ談話③-5 アジア、中国ものに見える "世界主義" 『中国傑物伝』

『中国傑物伝』には16人の「傑物」が取り上げられています。どのような基準で16人が選ばれたのでしょうか。陳舜臣さんは、文庫本の「あとがき」で、「好みに従ったと答えるほかない」とおっしゃっていますが…。

陳舜臣さんの「好み」とは何なのか？それを考えてみたいと思います。中公文庫版表紙→



	人物名	時 代	略 記
第一話	范蠡 はんれい	春秋時代	越王句踐の功臣。のち野に下り巨万の富を得る。陶朱公
第二話	子貢 しこう	春秋時代	孔門十哲の一。衛の人。孔子より31歳若いという
第三話	呂不韋 りよふい	～前 235	秦の丞相。始皇帝の父ともいう
第四話	張良 ちようりよう	～前 168	劉邦の謀臣、前漢創始の功臣
第五話	漢の宣帝 せんてい	前 91～前 49	前漢第9代皇帝。前漢賢帝の一人に数えられる
第六話	曹操 そうそう	155～220	三国魏の始祖、字は孟徳。その子、丕が魏を建国
第七話	苻堅 ふけん	338～385	五胡十六国の一、前秦第3代皇帝。華北を平定
第八話	張説 ちようえつ	667～730	則天武后の人材登用策が道を開いた。3度宰相に就く
第九話	馮道 ふどう	882～954	五代十国の5朝 11 帝に宰相として仕えた
第十話	王安石 おうあんせき	1021～1086	北宋、神宗の信任を得て宰相となり新法を実施
第十一話	耶律楚材 やりつそざい	1190～1244	モンゴル帝国の政治家。遼の王族出身
第十二話	劉基 りゆうき	1311～1375	元末明初。明建国、元勲の一人
第十三話	鄭和 ていわ	1371～1434 頃	明、永楽朝期、大船隊を率い南洋・インド方面に遠征
第十四話	順治帝 じゅんちてい	1638～1661	清朝第 3 代皇帝。都を北京に遷した
第十五話	左宗棠 さそうとう	1812～1885	曾国藩の下で太平天国を平定。のち、洋務運動を推進
第十六話	黄興 こうこう	1874～1916	孫文らと中国同盟会を結成。辛亥革命を推進

中公文庫版『中国傑物伝』井波律子「解説」
抜粋引用 傍線は加筆

この作品において、十六人の生の軌跡は、あくまで歴史資料にもとづいて追求され、想像力の介入による虚構への傾斜は、ストイックにせきとめられている。このようにも
う一步、筆をすすめれば、小説が誕生する寸前で、踏みと
どまろうとする抑制が、この作品に張りつめた快い緊張感
をもたらしているといえよう。しかし逆にいえば、それは、
小説家陳舜臣氏が抑制を解きはなち、大いなる創作の地平
に踏み出そうとするとき、『中国傑物伝』の十六人の傑物
はいずれも、その壮大な小説世界の主人公になりうる存在
だということでもある。
おそろしくゴージャスなこの十六人の顔ぶれの選び方に
は、陳舜臣氏の志向や好みがくつきりとあらわれており、
まことに興味深い。

コスモポリタニズムと儒教的ヒューマニズムの結合

十六人のほとんどに共通する要素としてあげられるのは、
彼らが透徹した現実主義者であることだ。
理想をもった現実主義者であることが、本書に描かれる
傑物たちの多くに共通する要素だとはいえ、理想と現実の
バランスの取り方は各人各様である。
陳舜臣氏が愛する傑物たちの核となる「理想」は、時代
を越えて、みごとに一致している。それは、偏狭なナショ
ナリズムを打破して民族にとらわれることなく、生きとし
生ける者すべてに、幸いをもたらす社会を作りだそうとし
ることである。この明快このうえない強靱なヒューマニズ
ムが、「傑物たちの中国史」である本書『中国傑物伝』に
終始一貫して鳴り響く主調音となっている。ここに、日本
に住む中国人作家としての陳舜臣氏自身の血肉と化したコ
スモポリタニズムと、もっとも上質の儒教的ヒューマニズ
ムの美しい結合をみることもできよう。

耶律楚材は、来るべきボーダレス時代の先駆者！

《1. 人物》



陳舜臣さんは、飯田利行著『大モンゴル禪人宰相耶律楚材』跋文で次のように書いています。

「耶律楚材はふしぎな魅力をもつ人で、彼の息吹きはいまもこの世界にこだましているような気がする。契丹王朝の末裔でありながら、女真王朝の金に重臣として仕えた家に生まれ、自分はチンギス・ハンに降ってモン

ゴルの宰相となり、グローバルな活動をした」「耶律楚材は、来るべきボーダレス時代の先駆者とい
ってよい」「人類の生き方を示すみちしるべ」

■モンゴル帝国の政治家。遼の王族の出身。初め金に仕えたが、1215年ジンギス汗に降り、その西域遠征に従軍。オゴタイ汗の即位に功あり。学問にすぐれ、天文・地理・医学にも通じた。1190－1244。

《2. 時代背景》

唐が滅びたあと、半世紀ほどの混乱の時代を経て、宋が中原を統一したが、北方、契丹族の遼、続いて、女真族の金の力は強く、耶律楚材が生まれた12世紀末は、淮河以北は金の版図となり、宋は臨安(杭州)に遷都、南宋の時代となっていた。(右上の地図)

北方の草原では、チンギス・ハンによる諸部族の統一が進み、父が予想した新しい勢力が勃興する。そして、「草原に生まれた巨大な力が金国をのみこんだとき、その力に用いられる人物になれ」、という父の願いに答えるときが来る。

1215年、モンゴル軍は燕京(北京)を陥す。やがて、チンギス・ハンに召され(招くように工作し)、カラコルムに赴き、チンギス・ハンに仕える。

民族や文化の違いを乗り越えて、人々は相互に理解し、共存してゆかねばならぬという「作者の願望の体现者」として耶律楚材は描かれる。

《3. 陳舜臣『耶律楚材』に対する評、解説》

(1) 『耶律楚材』(1997年 集英社文庫)稲畑耕一郎による「解説」

十三世紀に生きた耶律楚材が、果して本当にそのような人間であったのかどうかは、ここでは問題ではない。作者陳舜臣は、耶律楚材の真正なる「伝記」や「評伝」を書こうとしたのではない。ある明確な意図をもって、これを「小説」化したのである。作品中の耶律楚材や他の登場人物には、作者の仮託し

た思いも多いはずである。



(2) 杉山正明『耶律楚材とその時代』(1996年 白帝社)「あとがき」

陳舜臣氏の『耶律楚材』は、楚材をあらんかぎり巨大化、聖人化した歴史ファンタジーであった。小説は、ここまで現実から離れて、虚空のなかに飛翔できるのか。(中略)ようするに、せいぜいが「華北サイズ」の人にすぎない耶律楚材を、「ユーラシア・サイズ」の「超人」に仕立て上げたいばかりに、無理を重ねざるをえず、「超歴史」の解釈を繰り返さざるをえなくなったのだろう。

《4. 陳舜臣『耶律楚材』の誕生》

顧みていえば、私は六十代が最もみのりの多い時代であったように思う。書きたいものを、ふさわしい雑誌や新聞に連載できるようになった。

私はいよいよ耶律楚材を書こうと思った。ちょうど読売新聞がチンギス・ハーンの墓をさがす、「ゴルバン・ゴル」計画を企画し、その三年目にあたっていた。現地では、江上波夫氏との対談などもあり、

私たちはモンゴルの草原に坐って、いろんなことを語り合った。草原を疾駆するモンゴル軍団のこと、その行きすぎを諫める耶律楚材の苦衷……。こんなさまざまな会話から小説『耶律楚材』が生まれたのである。

(『Who is 陳舜臣』「あとがき」より。右写真、耶律楚材祠前、も同著)



陳舜臣文学の白眉！『桃源郷』

《1. 陳舜臣さんの『桃源郷』は大理！？》

桃源郷といえば、誰もが武陵（現在の湖南省常德県）を連想するであろうが、私はその地を雲南にもとめた。武陵色を薄めるために、私は「境」を「郷」にあらため…。(『桃源郷』「この作品を読むかたがたへ」)

《2. 『桃源郷』あらすじ》

12世紀初めの中国。金によって遼（キタイ）は250年の歴史を閉じた。金に隷属することを潔しとしない耶律大石たちは西方に逃れ、西遼（カラ・キタイ）を立てた。大石はマニ教徒であったが、自身の信仰は心のうちにとどめ、信仰は強制すべきものではないと信じていた。理想の国家を築くべく陶羽(主人公)たちを西へ、ペルシャへと向かわせた。

陶羽たちは、ペルシャでは、アラムート^{さんさい}山砦の長老ハサン・サッバーフや天文学者・詩人ウマル・ハイヤムの薫陶を受け、さらに、行動・修業をともにする同志から感化を受けながらイベリア半島まで遍歴する。

唐代初期に中国に流伝したマニ教は、9世紀中葉

《3. 主人公一行の旅は大理、そして敦煌へ》

の廃仏令では、最も過酷な弾圧を受け、その信者たちはひそかに雲南に逃れ込み住み着いた。雲南の地は更に、北宋末の方臘^{ほうろう}の乱で排斥されたマニ教徒を受け容れた。

主人公一行が西方への旅から戻り、雲南の大理国を訪れたとき、そこでは、強い外圧もなく、宗教に寛容な段氏の下、仏教徒、イスラム教徒、マニ教徒が共存して暮らしていた。主人公一行の旅は、大理国を訪れたあとも、ベラサグン、敦煌…と続く。

敦煌に着いた陶羽たちは、瞎老(シャラオ 東方マニの領導者)の眩術の中で瞎老のサゼスションを受け、自分の進む道を見つける。

宗教に寛容な政権(例えば大理国の段氏のような統治者)のもとで、「まことの信仰」をもつ人たちが、俗界のわざを磨き、生き生きと生活している。そこが「桃源郷」なのだ。

《4. 名前をすてた宗教こそ「まことの信仰」》

宗教は、心のよりどころです。魂の救済ですね。しかし、科学が発達してくるにつれ、だんだんその部分がやせていくんですよ、魂の部分がね。

今は、心のよりどころを宗教だけに求める時代じゃないと思うんですよ。いわゆる、今までの宗教ということですけども。

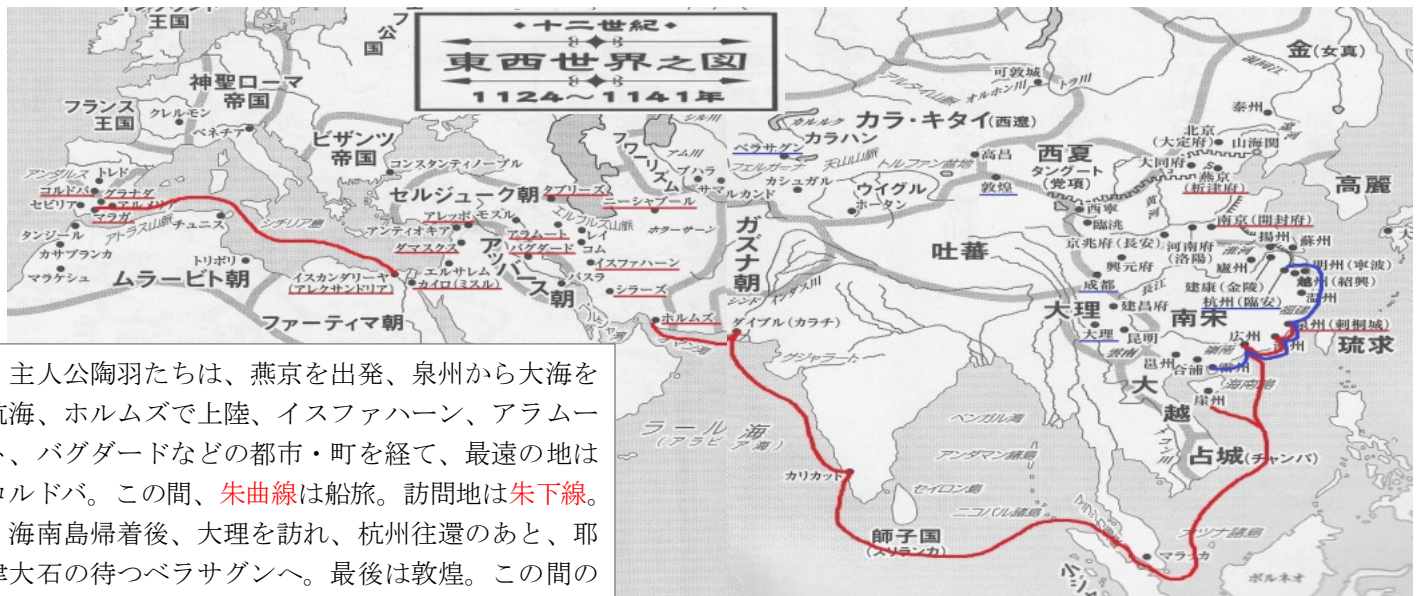
だから私は、宗教とか主義、思想という名前は全部消して、とにかく一つのもので、どこか心にあると。それだけでいいんじゃないかという、そういう世界がいつかは現出してくると思っているんです。

たとえば、それが、共産主義であってもそれでいいわけですよ。共産主義とかいう名前を消してね。とにかく、名前をつけるからいけないんですよ。なまじ名前をつけるから、戦争するんだという考えが私にはあるんです。

仏教だとか、キリスト教だとか、何々教だというものが、そもそも世の乱れになるという思い。そういう乱れた世の時代に、それを悟った人がいて、さっき言いましたけれど、ただ真心、一つのを心に持っている人たちが集まればいいんだと。そこがユートピアの世界なんです。

この世の中の乱れは、何に因ってきたんだと。それは名前からきているということです。

(『陳舜臣中国ライブラリー30』「自作の周辺」)



主人公陶羽たちは、燕京を出発、泉州から大海を航海、ホルムズで上陸、イスファハーン、アラムート、バグダードなどの都市・町を経て、最遠の地はコルドバ。この間、**朱曲線**は船旅。訪問地は**朱下線**。
海南島帰着後、大理を訪れ、杭州往還のあと、耶律大石の待つベラサグンへ。最後は敦煌。この間の行程は**青色**。